

2013年4月16日

～「がんになっても安心して暮らせる社会」の実現に向けて～ 職場でのがん経験者とのコミュニケーション調査報告

アフラック(アメリカンファミリー生命保険会社、日本における代表者・社長:外池 徹)は、職場におけるがん経験者と上司・同僚など周囲とのコミュニケーションに関するアンケートを実施し、集計結果をまとめました。(詳細は別紙をご参照ください)

【調査結果の概要】

1. がん経験者の身体や心、復帰後の治療に関する理解・認識について

＜職場でがん経験者と働いた機会があると、がん経験者の復帰後の仕事に対する理解度は高い＞

- がん経験者と働いたことのある上司・一般社員は、“がん経験者が復職しても仕事を続けるのは困難となるか”との問いに対して、「(全く・あまり)そうは思わない」と回答した割合が上司41.0%、一般社員47.5%と高く、がん経験者と働いた経験がない上司(23.0%)・一般社員(26.9%)と大きな差がみられた。

2. 仕事に復帰したがん経験者に対する態度・接し方について

＜部下にがん経験者がいたことがある上司は、いたことがない上司に比べ、がんや治療についてのコミュニケーションに、より積極的＞

- “病気や体調のことにはなるべく触れない”ことについて、がん経験者が部下にいたことがある上司の20.5%が「そうは思わない」と回答した。部下にがん経験者がいたことがない上司の約6割(56.4%)が「そう思う」と回答しているのと対照的な結果となった。

◎まとめ

本調査を通じて、年々増加しているがん罹患者の職場復帰に際して、上司・同僚など受け入れる側の不安は大きいものの、密なコミュニケーションや過去にがん経験者とともに働いた経験の有無によって、理解度や接し方に違いがあることがわかった。今後、がん経験者のスムーズな職場復帰を支援するための制度整備と平行して、コミュニケーションの重要性と、ともに働く社員向けの「がん教育」の必要性が明らかになった。

■ キャンサー・ソリューションズ株式会社 代表取締役社長 桜井なおみ氏のコメント

職場の上司や同僚の多くが「がんを経験した人でも仕事を続けられる」と回答するなど、「がん」に対する社会や職場の意識が、大きく変わってきていることが調査結果から見て取れる。がん経験者とともに働くことには、本人だけでなく、上司や同僚など周囲も不安を感じる人が多いのは事実だが、治療と仕事の両立には、コミュニケーションが大切であることも同時によくわかる。こうした意識変化をより広げていくためには、企業が社員向けに「がん教育」を実施するなど、職場全員が「がん」に対する意識を高めて、共感を深めることが重要であり、部下や同僚が、そして自分自身ががん罹患した際にも、働き続けることへの不安を和らげることにつながる。また、復帰に際して、職場の上司や本人に産業医を通じたフォローを行うことは、企業の「健康経営」のためにも不可欠。今後は、企業ががん教育の実施などの好事例を積み重ね、それを日本全国に広めていくことが、がんになっても安心して暮らせる社会の実現に近づいていくものと考えている。

職場での がん経験者とのコミュニケーション調査

= 目次 =

- 調査概要
- 回答者属性
- 単純集計・クロス集計
 - ・がん経験者とともに働く際の不安（部下の復帰に対する上司の不安）
 - ・がん経験者とともに働く際の不安（上司・同僚の復帰に対する不安）
 - ・産業医との連携
 - ・がん経験者の身体や心、復帰後の治療に関する理解／認識
 - ・復帰したがん経験者に対する態度
- まとめ
- 最後に:がん経験者及び周囲（職場）の人の生の声

1

調査概要

- 回答者：がん経験者が職場にいた経験のある人・ない人（男女）
- サンプル数：312名
- 調査方法：インターネット調査
- 調査実施期間：2012年12月12日(水)～12月14日(金)
- 割付条件：
 - ① がん経験者が職場にいたことの有無(過去10年) - 50 : 50
 - ② がん経験者との職場における関係
(がん経験者が職場にいたことがある場合)
 - ・がん経験者が部下、もしくは上司/同僚 - 50 : 50
(がん経験者が職場にいたことのない場合)
 - ・現在の職責(部下の有無) - 50 : 50
- 実施機関：株式会社 キャンサースキャン
- 調査協力：キャンサー・ソリューションズ 株式会社

2

回答者属性

3

属性

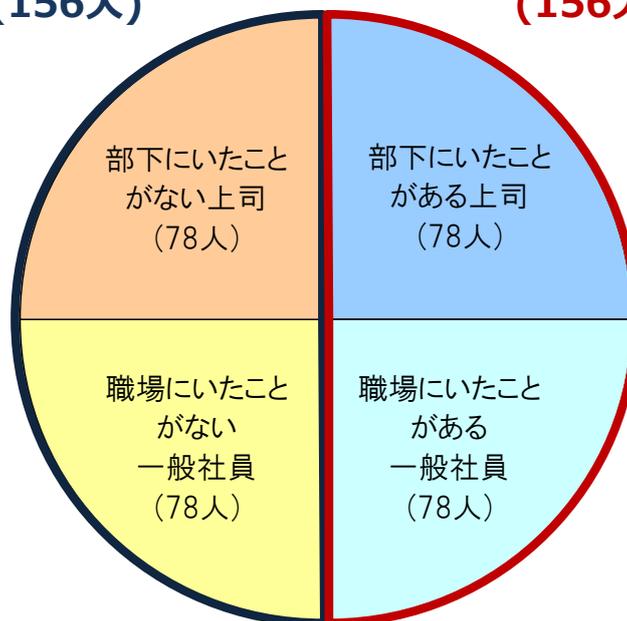
職場でがん経験者と働いた経験

N= 312

がん経験者が…

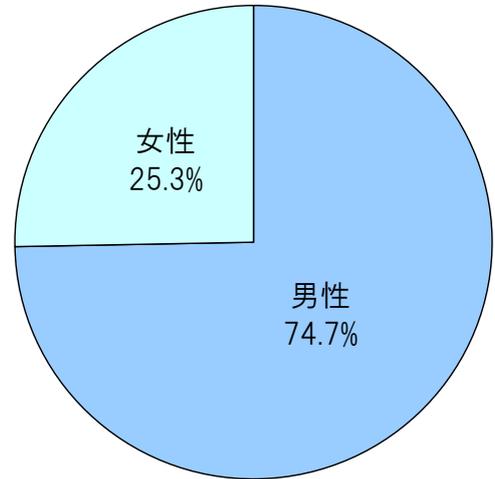
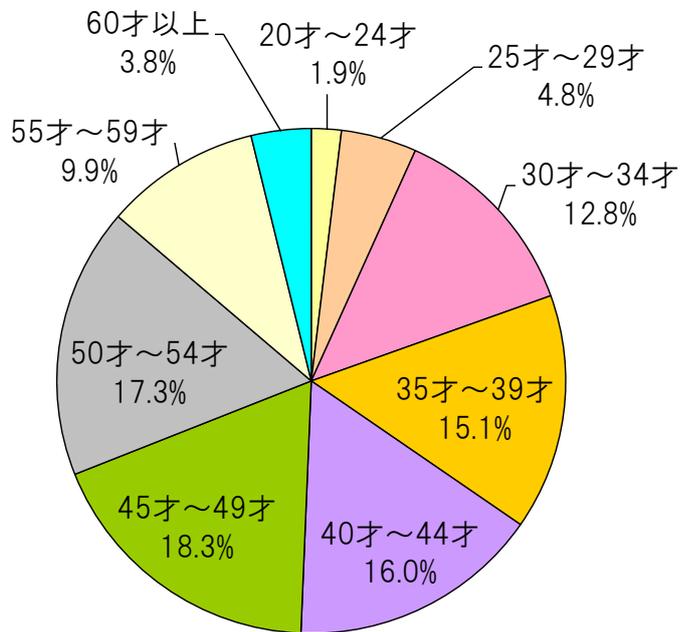
職場にいた経験がない
(156人)

職場にいた経験がある
(156人)



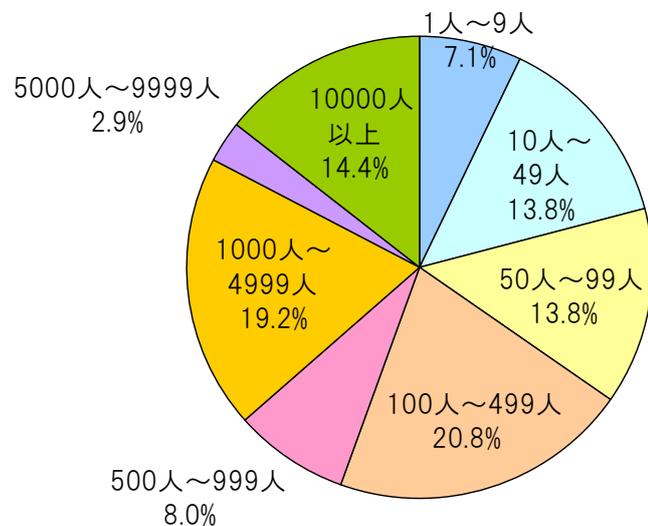
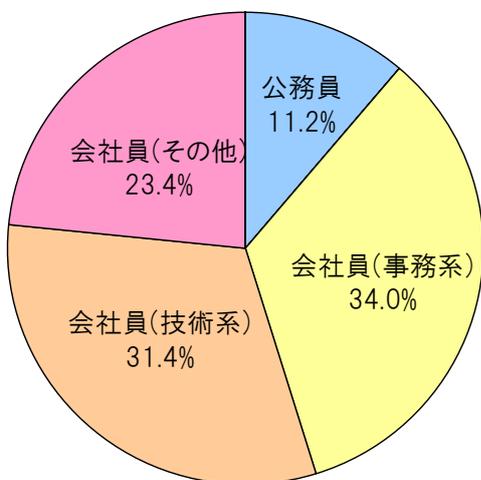
4

N= 312



5

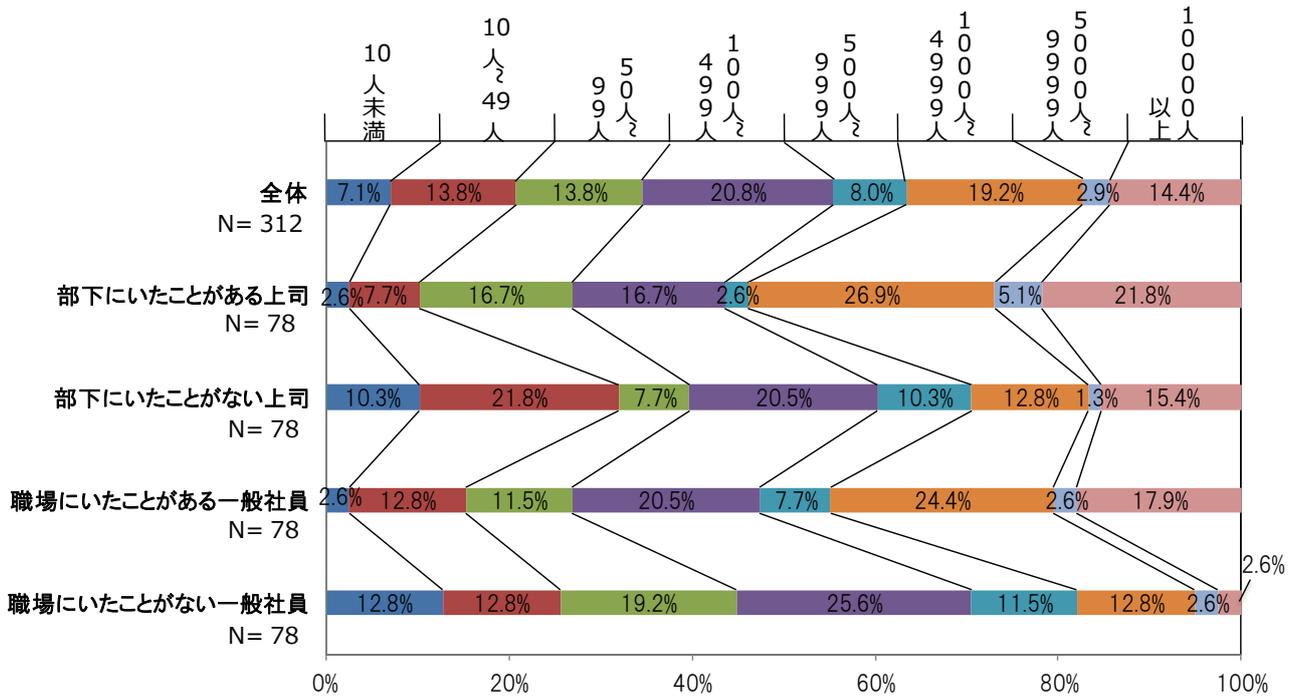
N= 312



6

属性

会社規模と、職場でがん経験者と働いた経験の有無



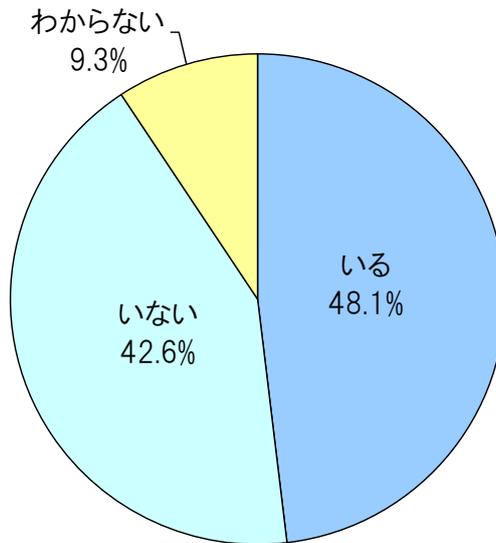
部下にせよ上司・同僚にせよ、職場にがん経験者がいたことがある人は、勤めている会社の規模が大きい傾向にあった。

7

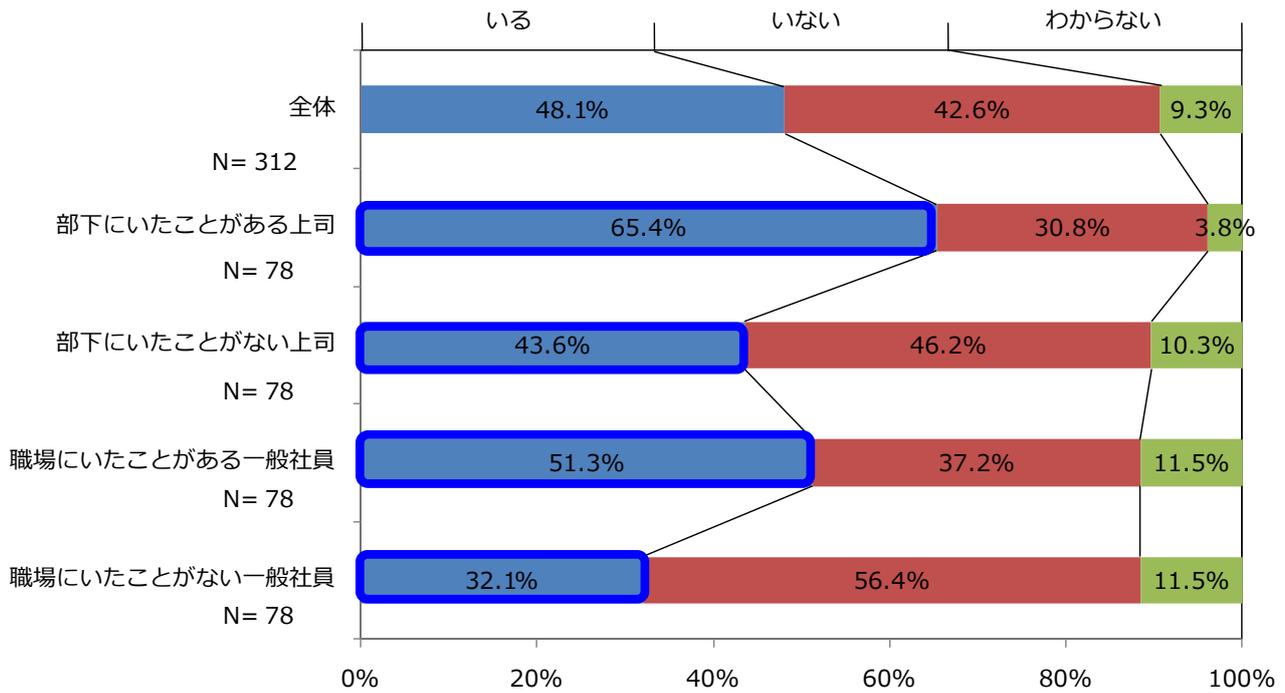
属性

職場における産業医の有無

N= 312



8

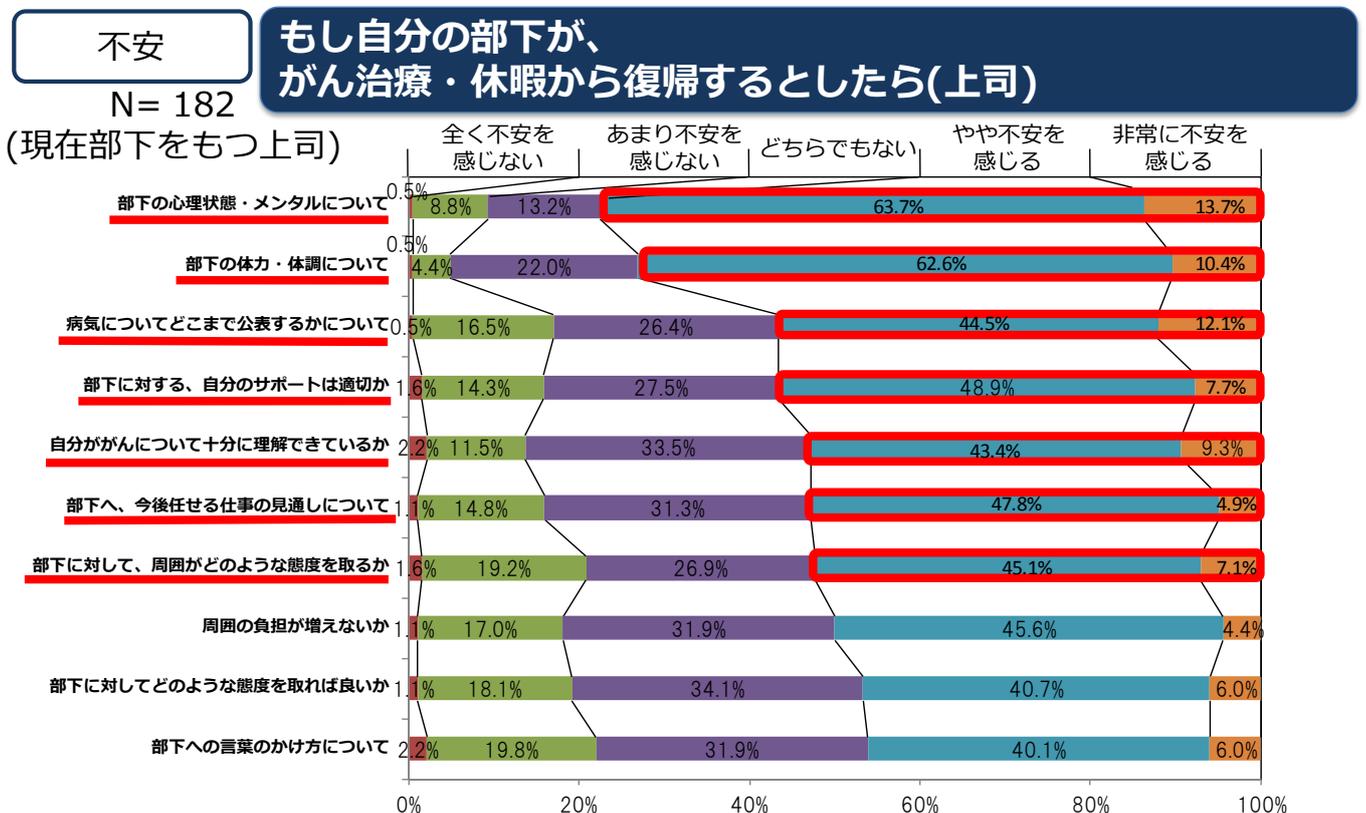


産業医の配置基準は社員数で決まるため、職場にがん経験者がいたことがある人の会社は社員数も多く、自ずと産業医のいる割合が高い。

9

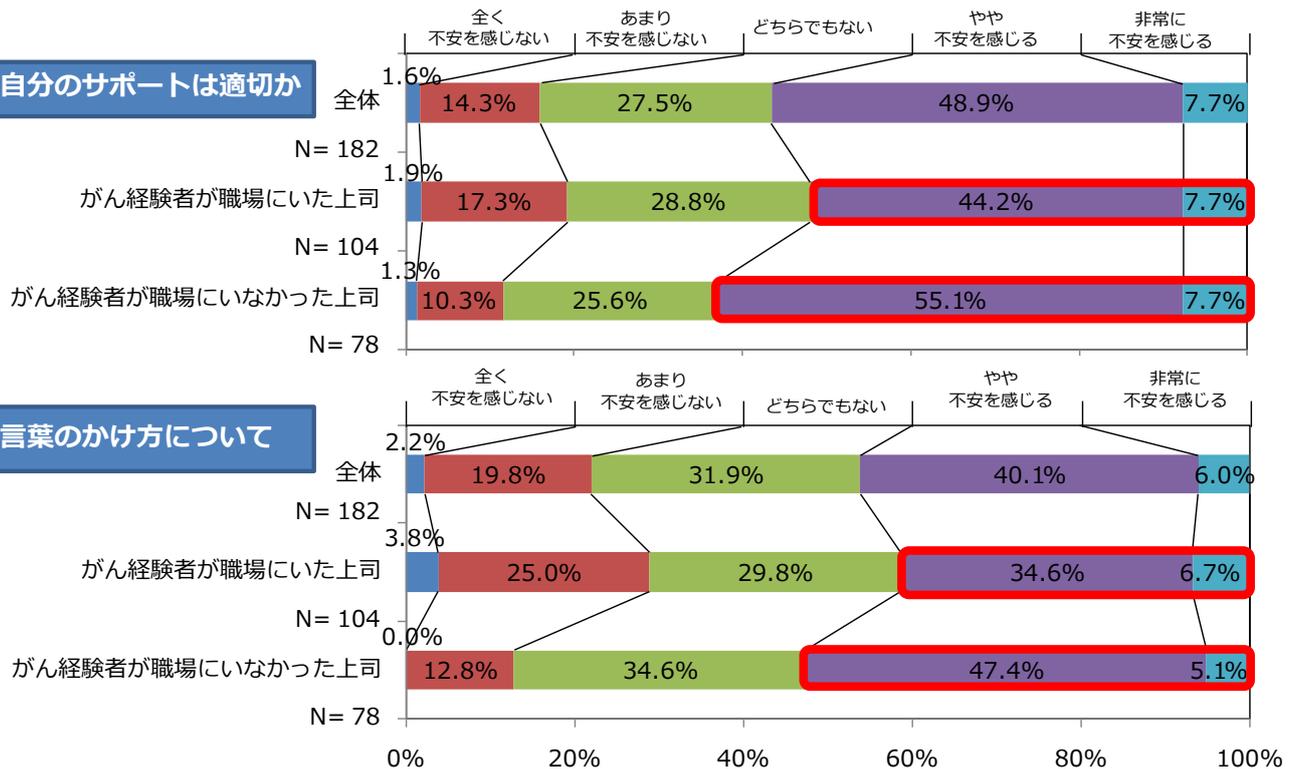
単純集計・クロス集計

がん経験者とともに働く際の不安 (部下の復帰に対する上司の不安)

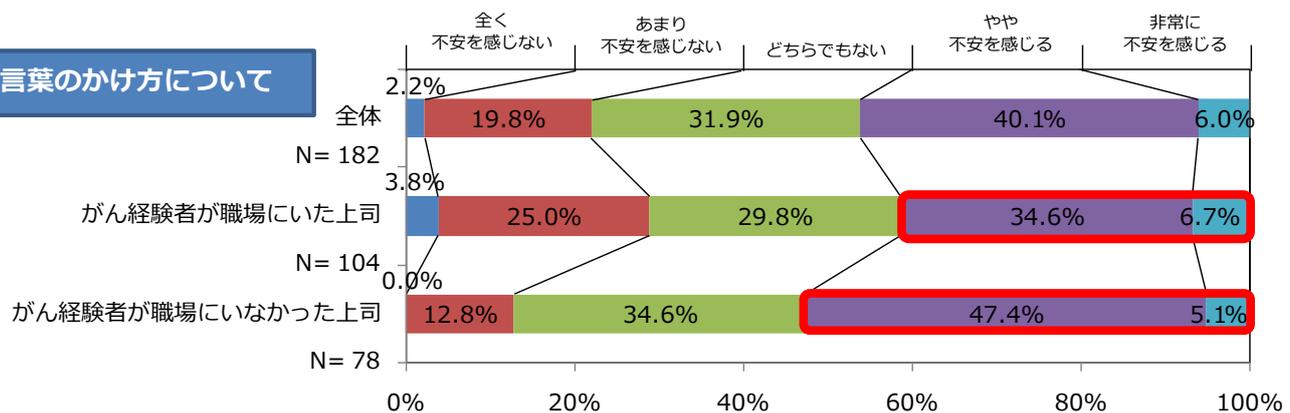


がん治療・休暇から復帰する部下の“心理状態・メンタルについて”や、“体力・体調について”不安を感じる上司は7~8割にのぼる。
 加えて、“どこまで公表するか”、“自分のサポートは適切か”、“がんについて十分に理解できているか”など、上司の不安は多岐にわたる。

自分のサポートは適切か



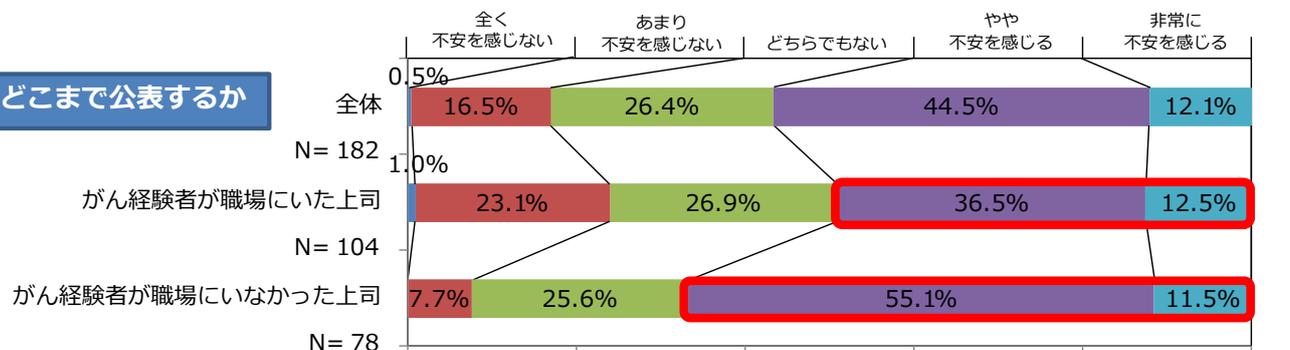
言葉のかけ方について



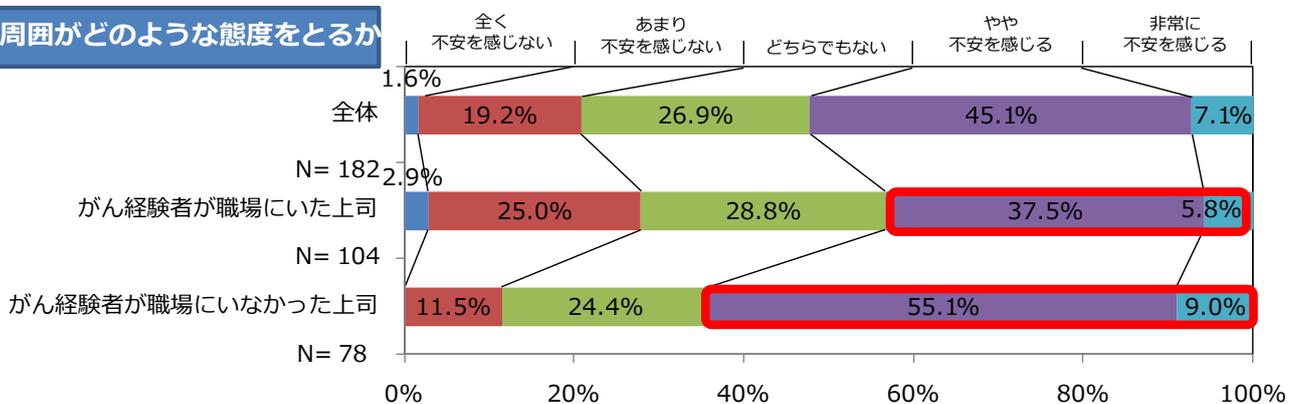
“自分のサポートは適切か”、“言葉のかけ方”など、復帰する部下に対する自分の態度に関する項目では、過去にがん経験者と働いた経験があれば、その不安は軽減している。

13

どこまで公表するか



周囲がどのような態度をとるか



“どこまで公表するか”、“周囲がどのような態度をとるか”といった、周囲に関する項目では、過去にがん経験者と働いた経験による不安の軽減は、より大きい。

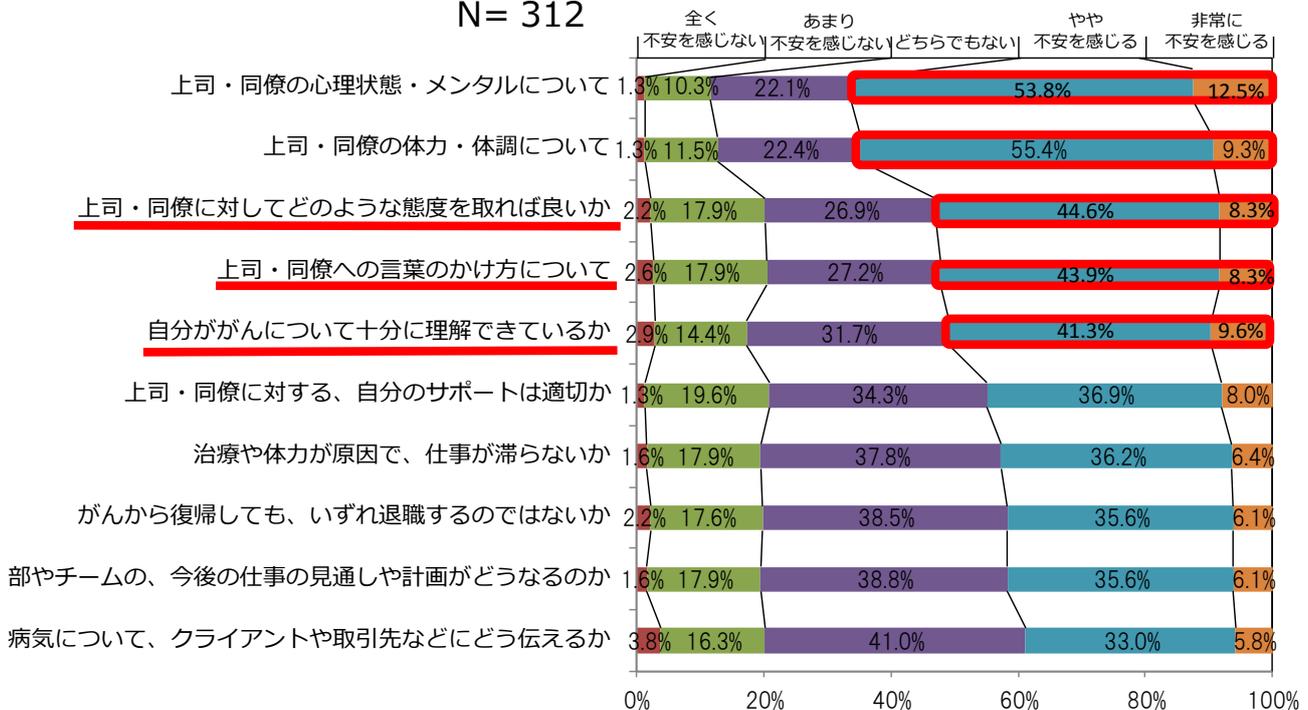
14

がん経験者とともに働く際の不安 (上司・同僚の復帰に対する不安)

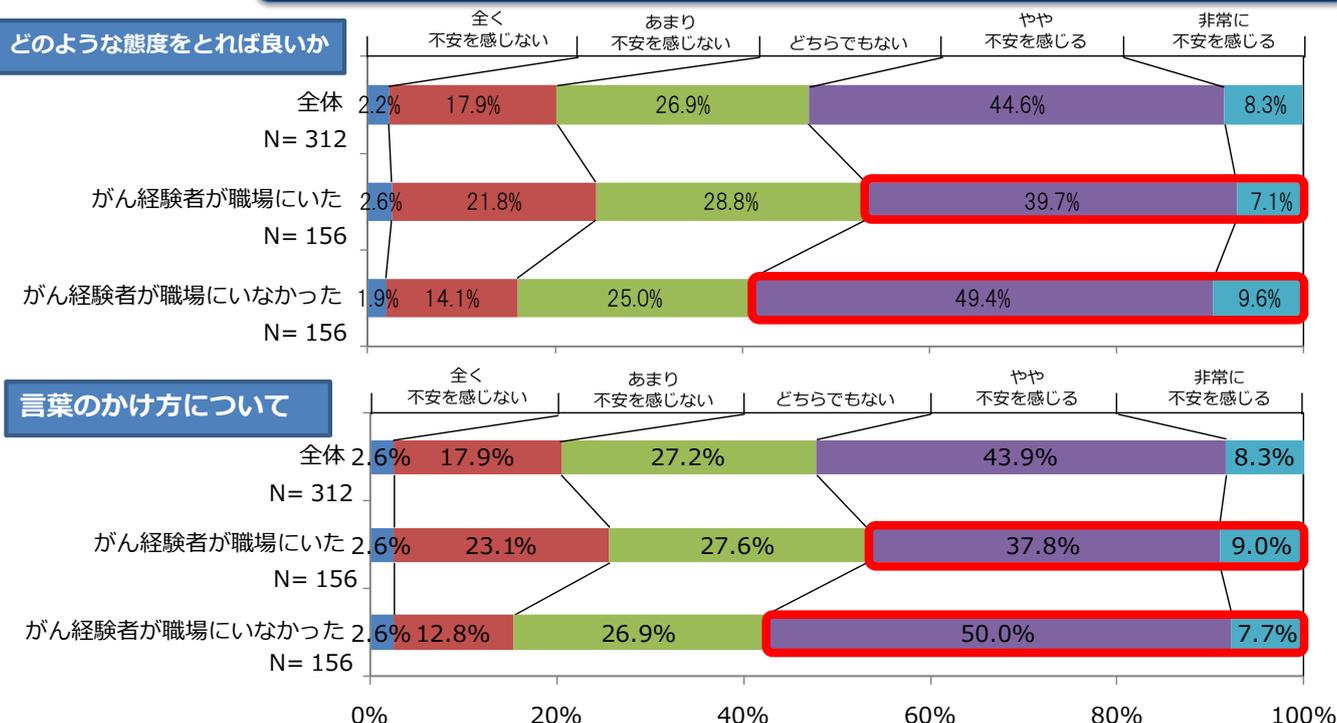
不安

もし上司・同僚が、がん治療・休暇から復帰するとしたら

N = 312



まずは、復帰する上司・同僚の“心理状態・メンタルについて”や、“体力・体調について”、最も不安を感じているのは、部下の復帰時の上司同様。続いて、“どのような態度をとれば良いか”、“言葉のかけ方”、“がんについて十分に理解できているか”について不安を感じる人も5割を超える。



“どのような態度をとれば良いか”、“言葉のかけ方”など、自分の復帰する上司・同僚に対する態度に関する項目では、過去にがん経験者と働いた経験があれば、その不安は軽減している。

17

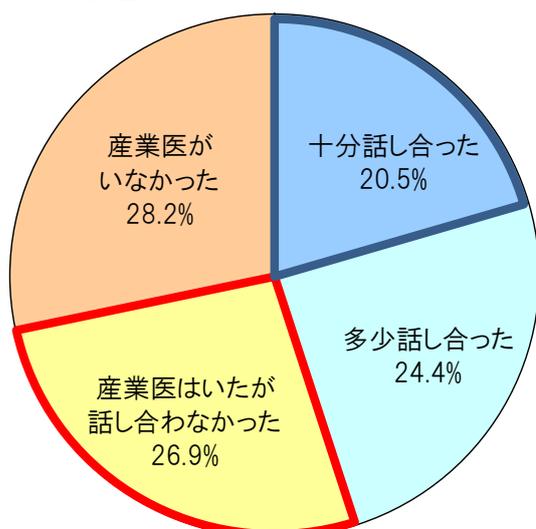
がん経験者とともに働く際の不安 まとめ

- 部下、または上司/同僚の復帰に際して、がん経験者と働くこととなった上司や、一般社員の一番の不安は、復帰する経験者の“心理状態・メンタル”や、“体力・体調”について
- それに加えて、部下が復帰する際の上司の不安は自分のサポート体制や周囲への働きかけについてなど、多岐にわたる
 - ✓ “自分のサポートは適切か”、“がんについて十分に理解できているか”、“どこまで公表するか”、“周囲がどのような態度を取るか”、“今後任せる仕事の見通し”などの項目においても5割を超える人が不安を感じている
- 一方、一般社員の不安は、自分と経験者との関係に関することが主
 - ✓ “どのような態度を取れば良いか”、“言葉のかけ方”、“がんについて十分に理解できているか”などの項目での不安が5割を超える
- 上司・一般社員ともに、過去に職場でがん経験者と働いた経験があれば、自分とがん経験者との関わり方や、周囲とがん経験者との関係についての不安は軽減する傾向

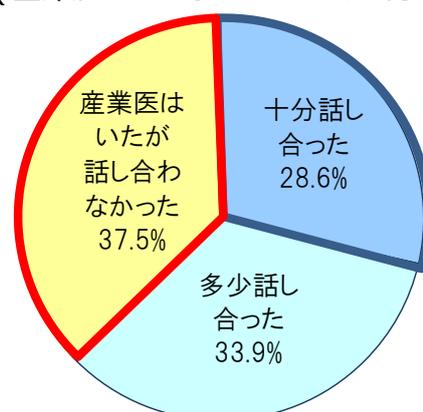
産業医との連携

産業医との連携 部下が職場復帰するにあたり、産業医と話し合ったか

N= 78
(復帰したがん経験者が部下にいたことがある上司)

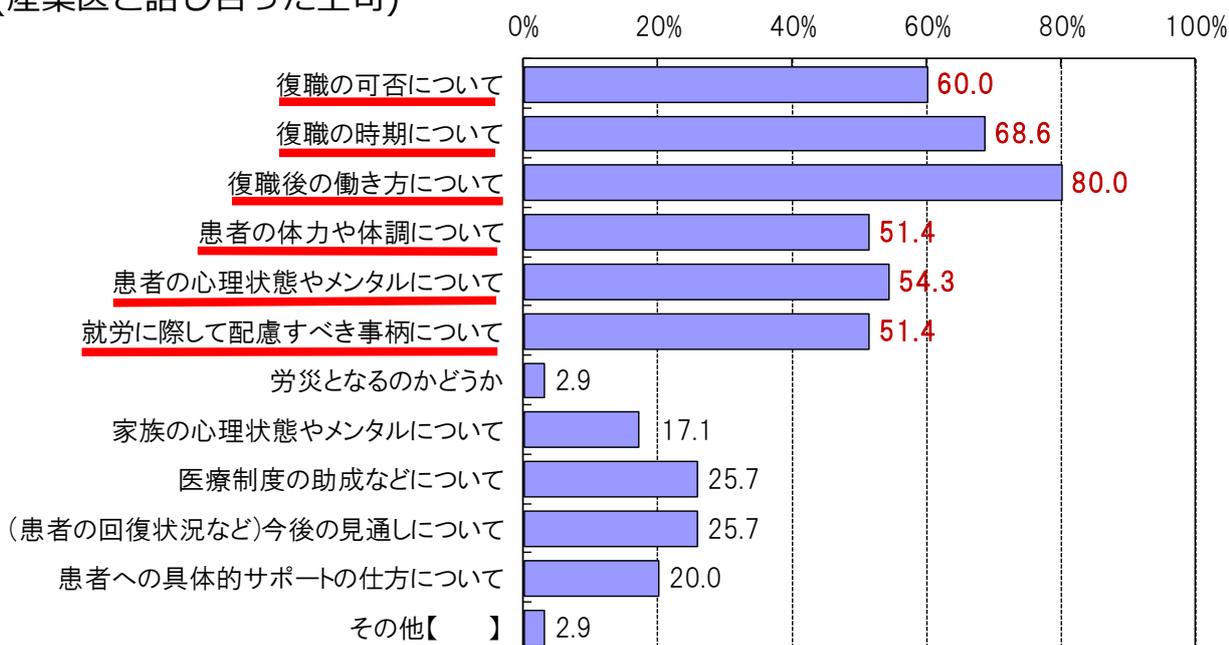


N= 56
(産業医がいなかった人を除く)



がん罹患した部下が職場に復帰するにあたり、産業医と十分に話し合ったのはわずか20.5%。一方、産業医がいたにも関わらず話し合わなかった上司は、26.9%にのぼった。産業医の活用の余地があると考えられる。ただし、産業医がないとするケースについては、事業所規模が小さく、産業医がない場合と、産業医がいても非常勤である、もしくは、存在が認識されていない、などの場合も考えられる。

N= 35
(産業医と話し合った上司)

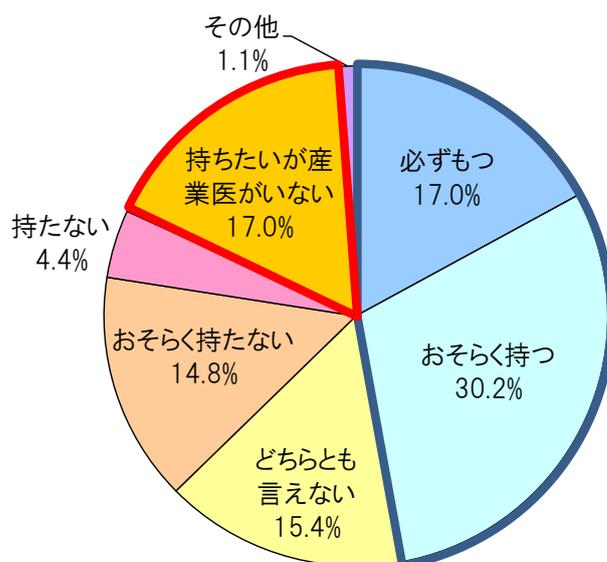


産業医と話し合った事柄としては、復職後の“働き方”や“時期”、そもそもの“復職の可否”についてが6~8割。

また、“体力や体調”、“心理状態やメンタル”、“配慮すべき事柄”について相談する上司が相談者中、5割を超える様子が見て取れる。

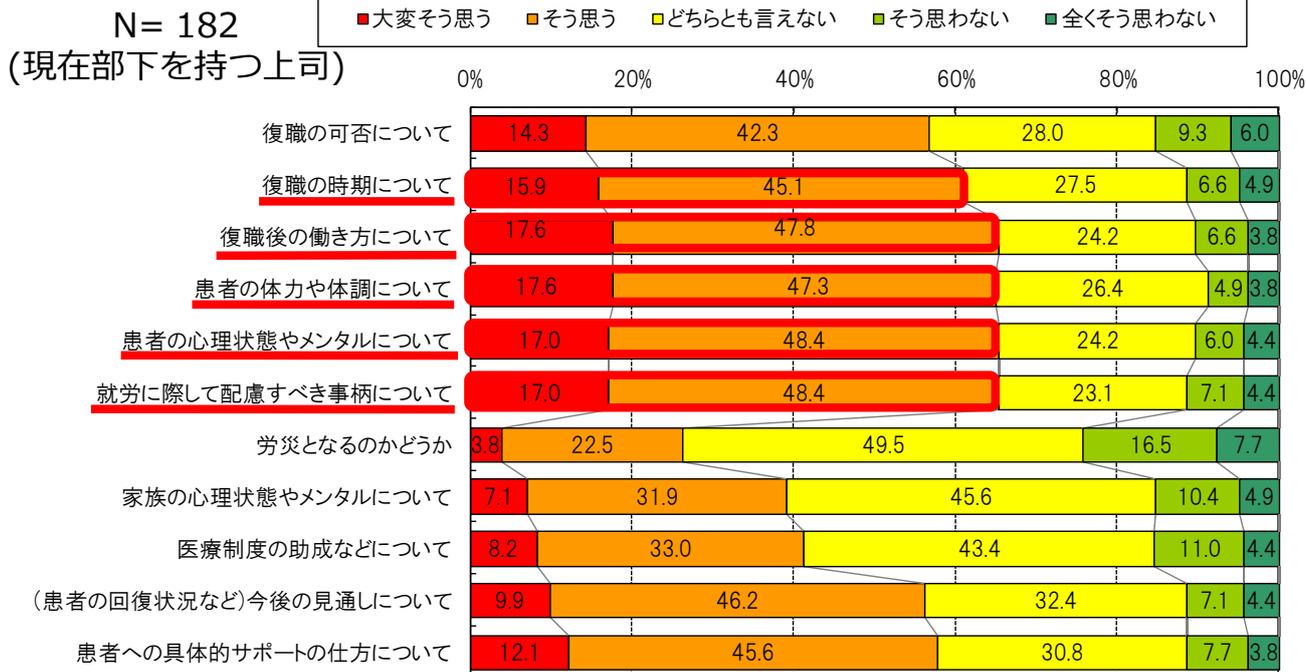
21

N= 182
(現在部下を持つ上司)



今後、もしがんに罹患した部下が復帰する場合、産業医と話し合いの場を、“(必ず・おそらく)持つ”のは47.2%にとどまった。
“持ちたいが産業医がない”(17.0%)という現実も。

22



今後、もしがんに罹患した部下が復帰する場合には、“復職後の働き方”や、“復職の時期”、患者の“体力や体調”、“心理状態やメンタル”について、また、“就労に際して配慮すべき事柄”について、相談したい上司は6割を超える。

23

産業医との連携 まとめ

- 部下の復帰に際して感じる不安は大きいものの、部下が復帰するにあたり産業医と十分に話し合った上司は、全体のわずか20.5%。産業医がいたにもかかわらず話し合わなかった上司(26.9%)が十分話し合った上司(20.5%)を上回り、がん罹患者の復帰にあたって産業医の活用が十分でない様子が見て取れる
- 一方、相談する“産業医がいなかった”上司も28.2%にのぼり、「話し合いの場を持ちたいが、産業医がない」(17.0%)という回答も
- 産業医に相談したい事柄としては、“復職後の働き方”や、“考慮すべき事柄”、“体力や体調”、“心理状態やメンタル”についてが、6割を超えた

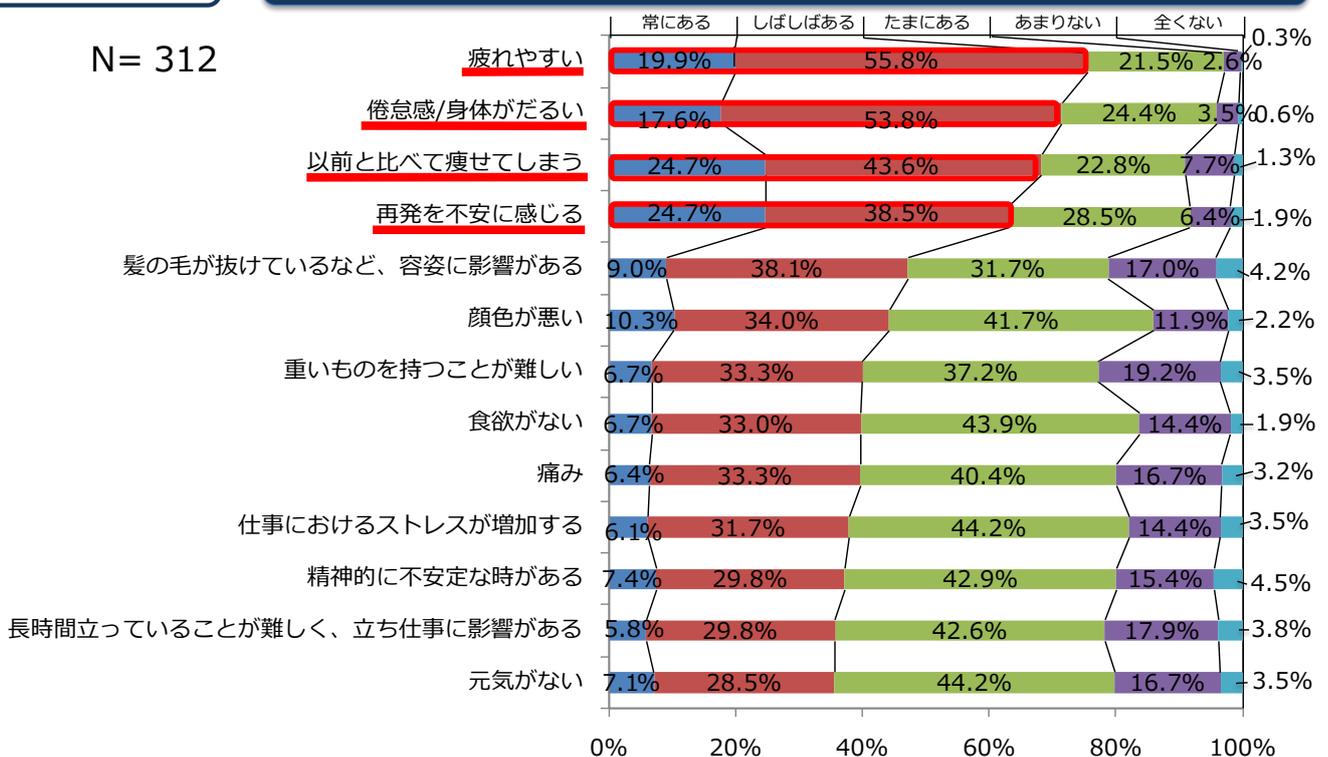
24

がん経験者の身体や心、 復帰後の治療に関する 理解/認識

理解/認識

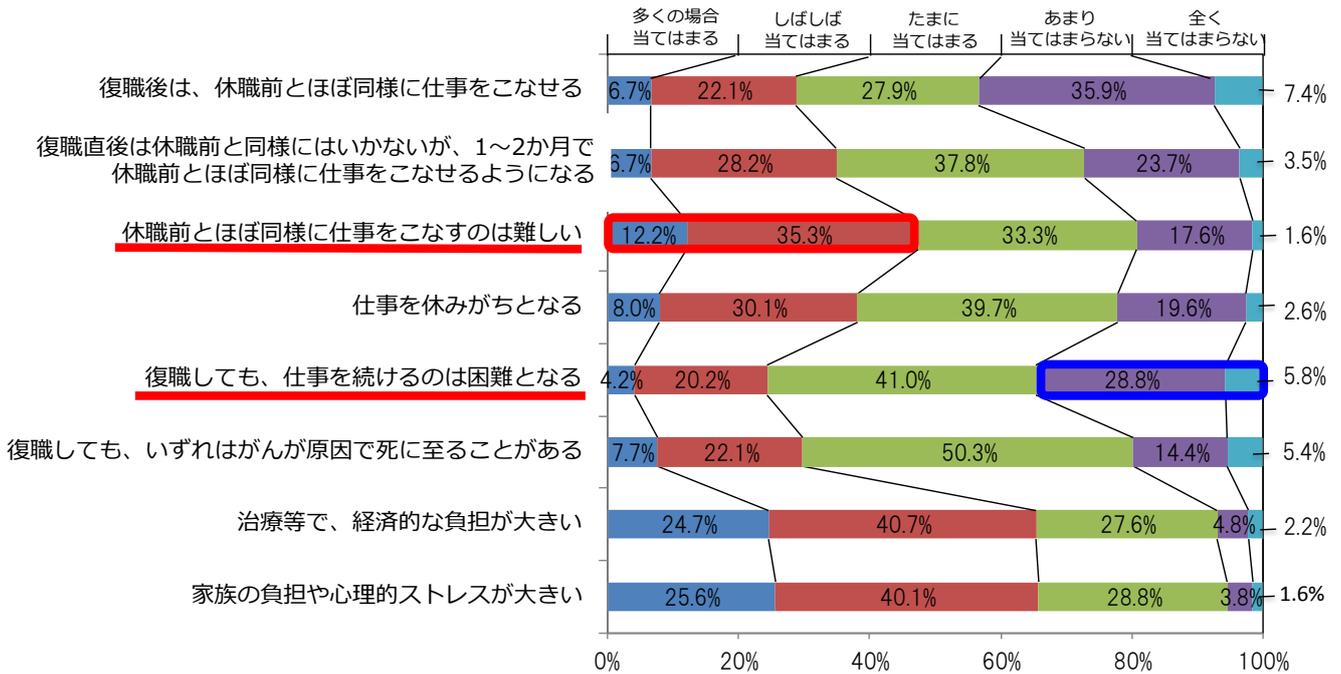
職場に復帰したがん経験者の身体や心の状態

N = 312



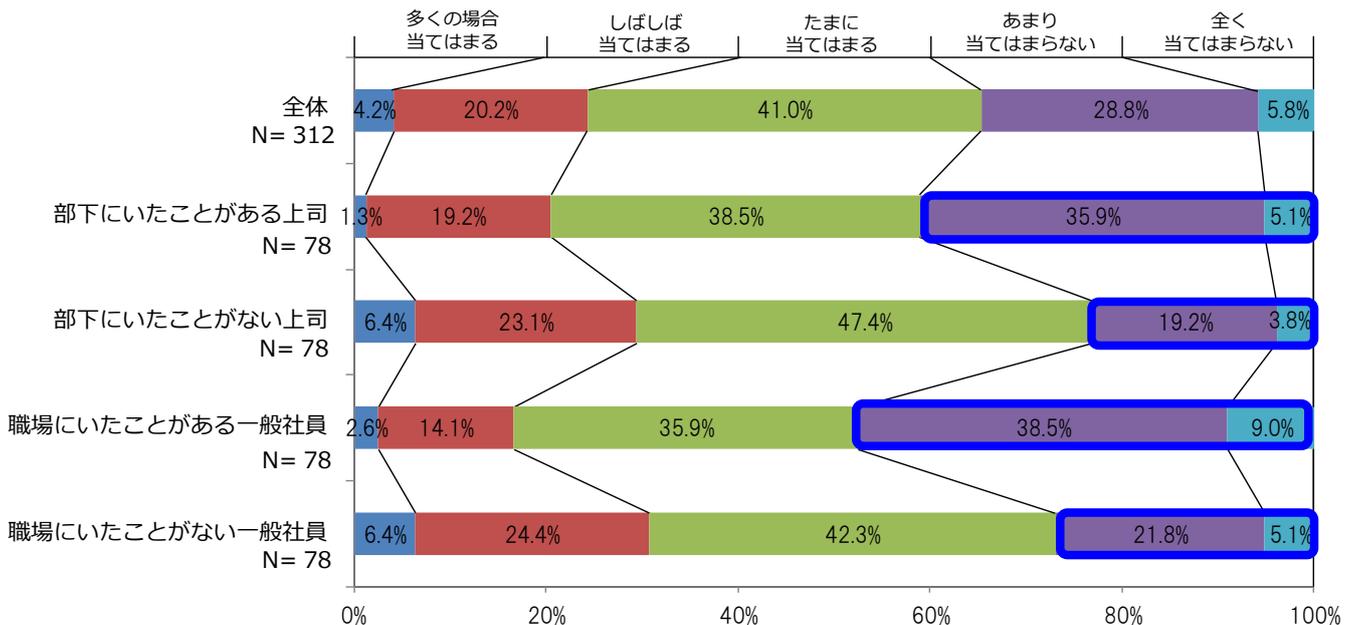
職場に復帰したがん経験者の身体や心の状態については、“疲れやすい”、“倦怠感/身体がだるい”といった体調に関することや、“痩せてしまう”という外から見て取れる変化、“再発を不安に感じる”といった心の状況について、「(常に・しばしば) あり」と認識している人が6割を超えていた。

N = 312



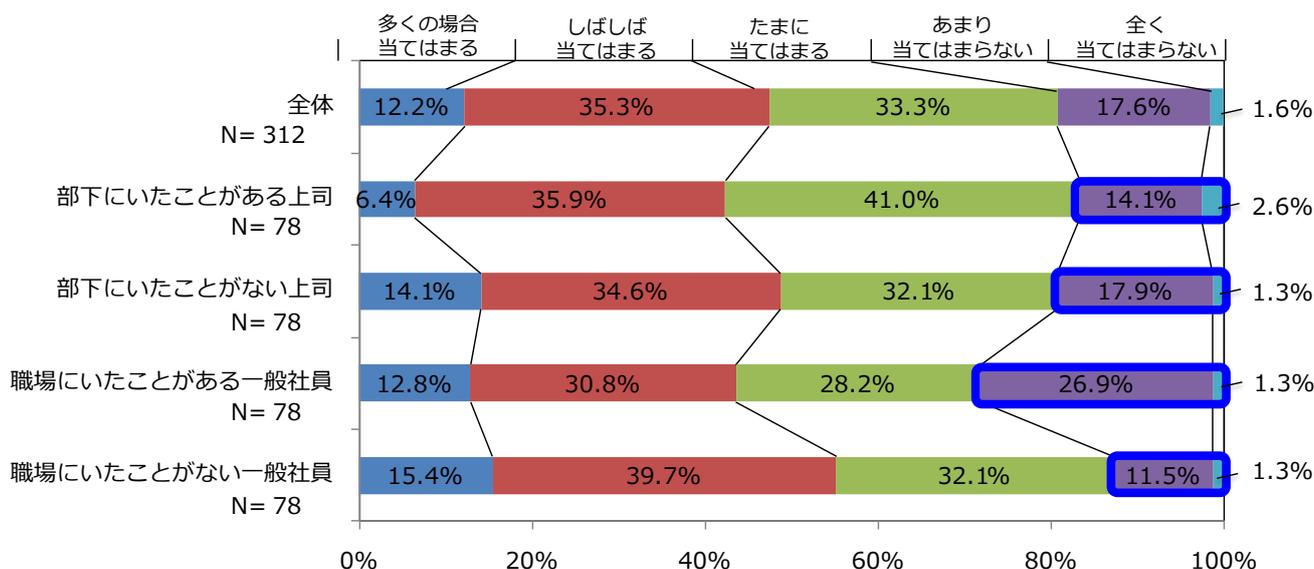
“休職前とほぼ同様に仕事をこなすのが難しい”に「(多くの場合・しばしば)当てはまる」と答えた人が47.5%にのぼる半面、“復職しても、仕事を続けるのは困難となる”に対して、「(あまり・全く)当てはまらない」との回答が34.6%。

復職しても、仕事を続けるのは困難となる



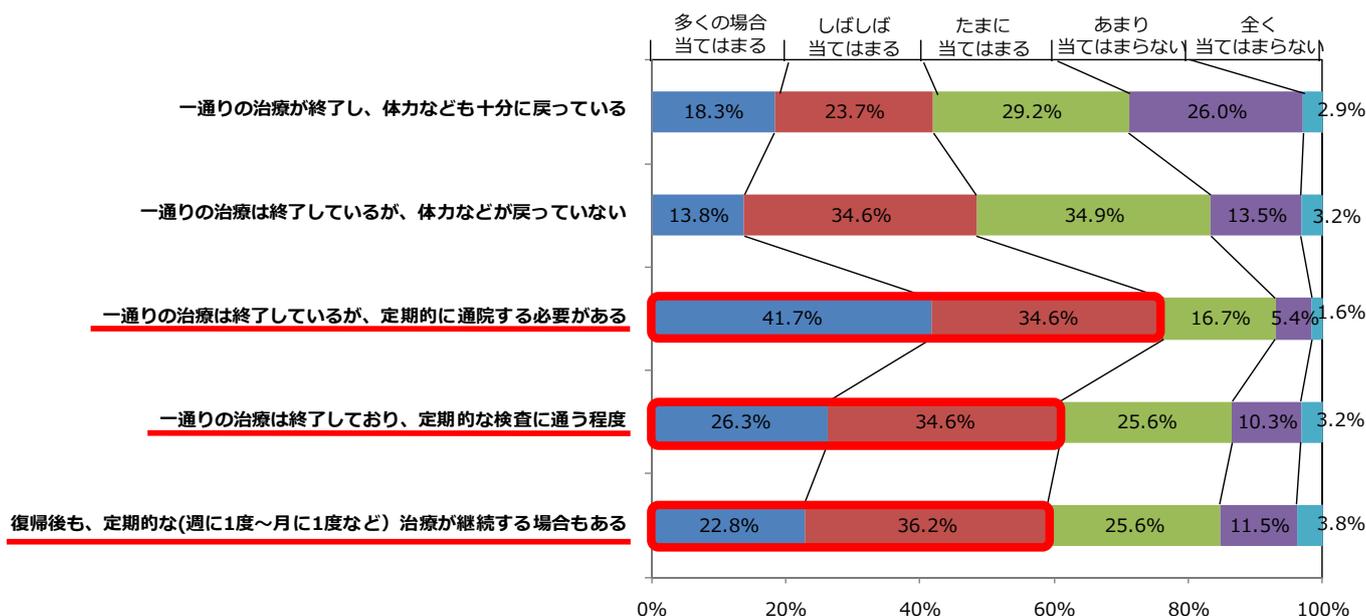
がん経験者と働いたことがある上司、及び一般社員は、“復職しても、仕事を続けるのは困難となる”に対して、「(あまり・全く)当てはまらない」と回答した率が高く(それぞれ、41.0%・47.5%)、職場でがん経験者と働いた経験がない上司(23.0%)・一般社員(26.9%)に比べて、大きく差がついた。

休職前とほぼ同様に仕事をこなすのは難しい



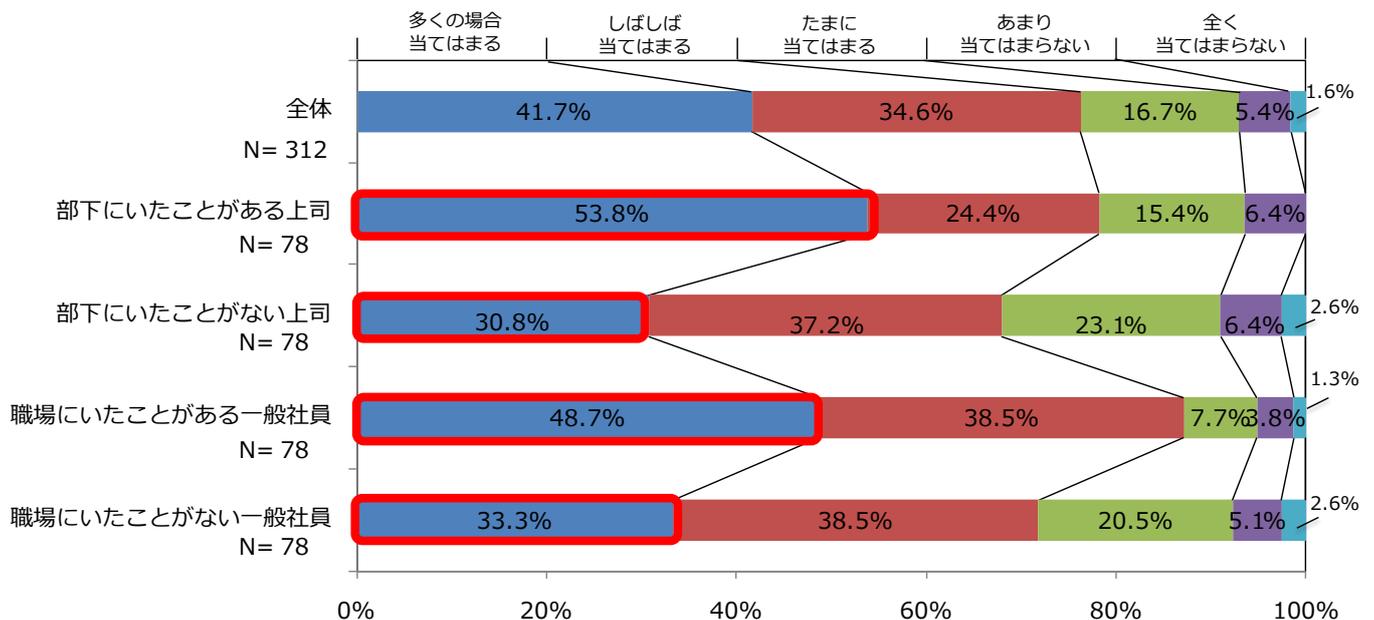
“復職しても、仕事を続けるのは困難となる”に比べると、“休職前とほぼ同様に仕事をこなすのは難しい”との問いへの回答では、職場でがん経験者と働いた経験による差はそれほど大きくない。
過去にがん経験者とともに働いたことがあれば、「休職前と同様ではないが、何らかの形で仕事を継続できる」との思いがより強いと考えられる。

N= 312



復帰後の治療については、“定期的に通院する必要がある”と認識している人が77%に上る。また、“定期的な検査”や、“定期的な治療が継続”についても5割を超える人が「(多く・しばしば) 当てはまる」と回答。

復帰の際には、一通りの治療は終了しているが、定期的に通院する必要がある



がん経験者と働いたことがある上司、及び一般社員は、5割近くが、“定期的に通院”を「多くの場合当てはまる」と認識。がん経験者と働いた経験のない上司/一般社員に比べて、定期的通院をより「一般的なこと」と受け止めていることがわかる。

31

がん経験者の身体や心、復帰後の治療に関する理解/認識 まとめ

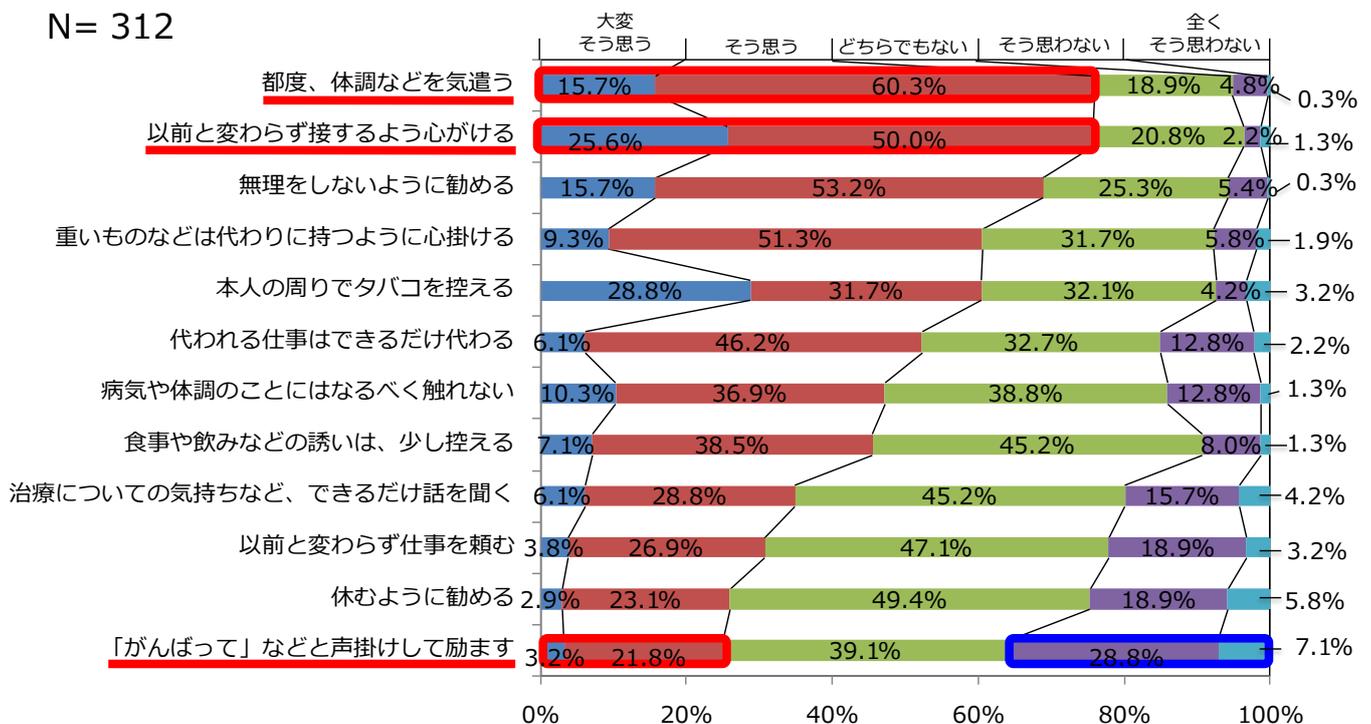
- 約半数(47.5%)が、“休職前とほぼ同様に仕事をこなすのが難しい”と認識
- 半面、“復職しても、仕事を続けるのは困難となる”に対して「(あまり・全く)当てはまらない」との回答が34.6%にのぼった
 - ✓ がん経験者と働いたことがある上司、及び一般社員は「(あまり・全く)当てはまらない」と回答した率が高く(それぞれ、41.0%・47.5%)、職場でがん経験者と働いた経験がない上司(23.0%)・一般社員(26.9%)に比べ、よりがん経験者の就労の継続に積極的な気持ちを持っていることがわかる
- 復帰後の治療については、“定期的に通院する必要がある”と認識している人が全体の76.3%
 - ✓ がん経験者を受け入れたことがある上司、及び一般社員の5割近くは、この“定期的な通院”を「多くの場合当てはまる」と認識。より、「一般的なこと」と理解していることが分かる

復帰したがん経験者に対する態度

態度

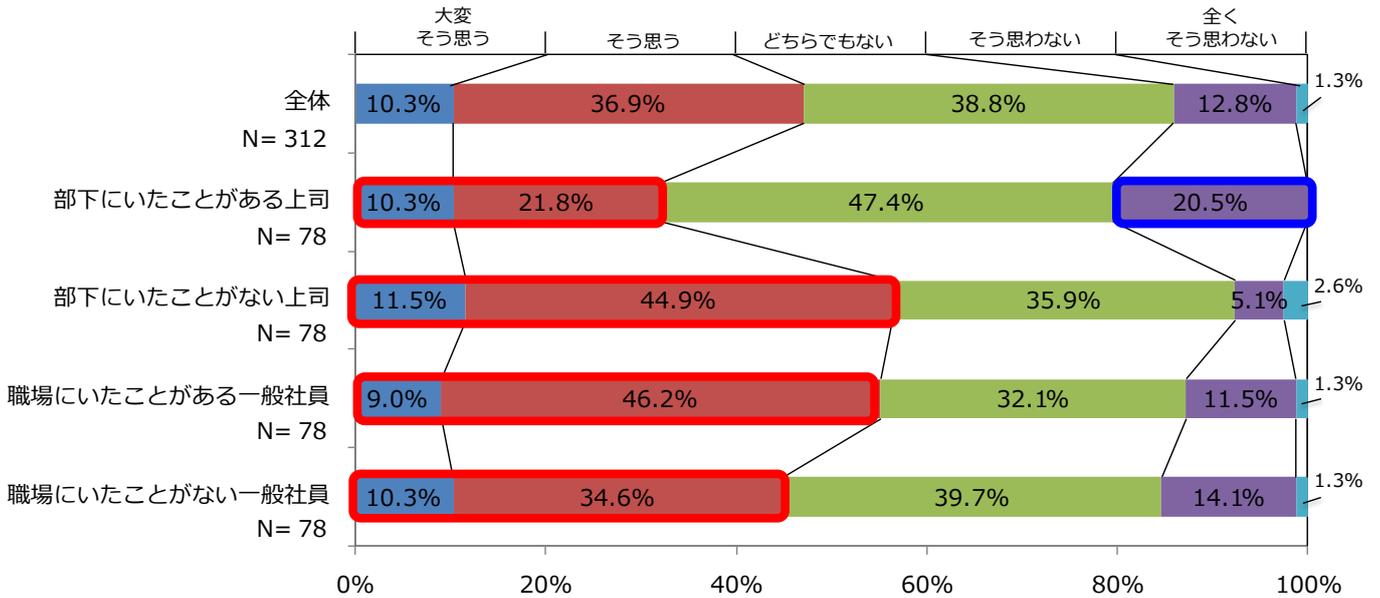
職場に復帰したがん経験者に、どのような態度をとると思うか

N = 312



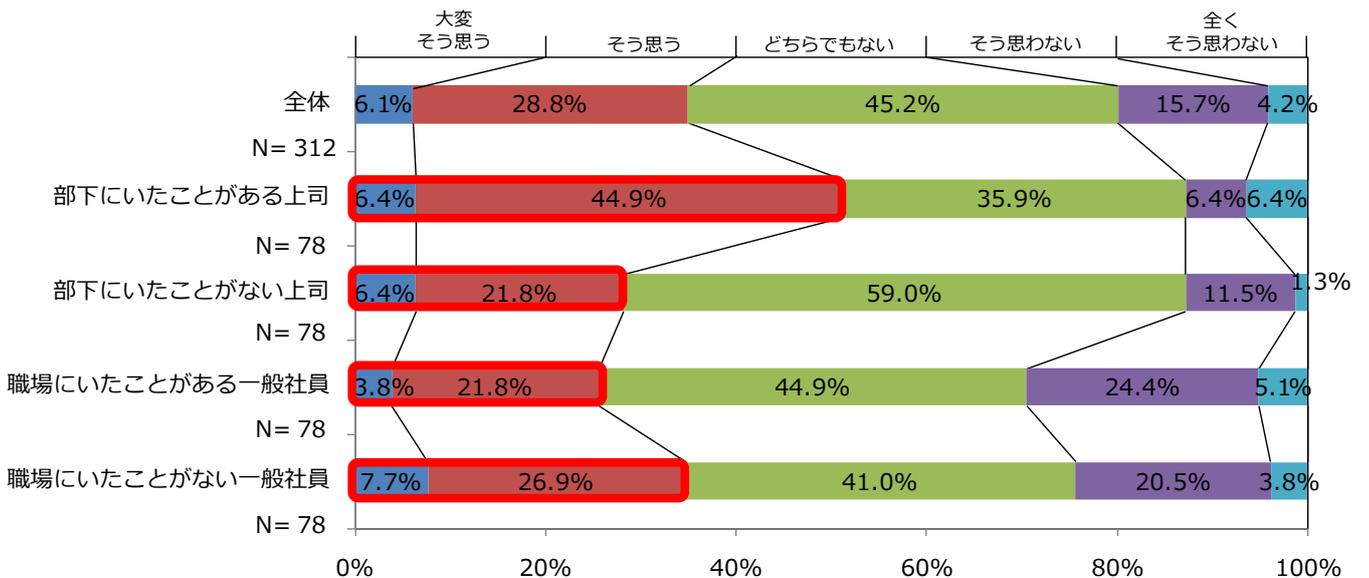
“体調などを気遣う”、“以前と変わらず接するよう心がける”人がそれぞれ、76.0%・75.6%と、大多数に上った。
 “「がんばって」などと声掛けして励ます”ことに関しては、25.0%がそう思うと回答した半面、35.9%がそう思わないと回答。大きく傾向が分かれた。

病気や体調のことにはなるべく触れない



がん経験者が部下にいたことがある上司の20.5%が、「病気や体調のことにはなるべく触れない」ことについて、「そう思わない」と回答。反面、「(大変)そう思う」は32.1%と、部下にいたことがない上司の56.4%に比べて大きく差がたった。

治療についての気持ちなど、できるだけ話を聞く



一方で、がん経験者が部下にいたことがある上司は、「治療についての気持ちなど、できるだけ話を聞く」が51.3%にのぼり、部下にいたことがない上司(28.2%)に比べて、積極的にがんや治療についてコミュニケーションを取ろうとしている様子がうかがえる。

復帰したがん経験者に対する態度 まとめ

- 多くの方が、“体調などを気遣う”、“以前と変わらず接するよう心がける”と回答（それぞれ76.0%、75.6%）
- “「がんばって」などと声掛けして励ます”ことに関しては、25.0%が「(大変)そう思う」と回答した半面、35.9%が「(全く)そう思わない」と回答。大きく傾向が分かれた
- がん経験者が部下にいたことがある上司は、部下にいたことがない上司に比べ、がんや治療についてのコミュニケーションに積極的
 - ✓ “病気や体調のことにはなるべく触れない”ことについて、20.5%が「そう思わない」と回答。部下にいたことがない上司の約6割(56.4%)が「そう思う」と回答しているのと対照的
 - ✓ 一方で、がん経験者が部下にいたことがある上司は、“治療についての気持ちなど、できるだけ話を聞く”が51.3%にのぼり、部下にいたことがない上司の28.2%を大きく上回った

37

まとめ

38

職場でのがん経験者とのコミュニケーション調査報告 まとめ①

- 職場における“体力や体調に関する理解”、“心理的状況やメンタルに関する理解”については、がん経験者を受け入れる側の周囲の人も大きな不安を感じている
- 特に、上司の不安は、上記の点以外にも自分のサポートや声掛け、周囲との関係や周囲への働きかけについてなど、多岐にわたり、心理的負担が大きいことがうかがえる
- 不安を感じているものの、がん罹患者の復帰にあたって産業医の活用が十分でない様子。「話し合いの場を持ちたいが、産業医がいない」(17.0%)という現実も

39

職場でのがん経験者とのコミュニケーション調査報告 まとめ②

- がん経験者に対する理解は、過去に職場でがん経験者と働いた経験があれば深まり、不安も軽減する傾向。また、がん経験者が部下にいたことがある上司は、部下にいたことがない上司に比べ、がんや治療についてのコミュニケーションに積極的な傾向
- 約半数(47.5%)が、“休職前とほぼ同様に仕事をこなすのが難しい”と認識。しかし、その半面、“復職しても、仕事を続けるのは困難となる”に対して「(あまり・全く)当てはまらない」との回答が34.6%にのぼった
 - ✓ がん経験者と働いたことがある上司、及び一般社員は「(あまり・全く)当てはまらない」と回答した率が高く(それぞれ、41.0%・47.5%)、職場でがん経験者と働いたことがない上司(23.0%)・一般社員(26.9%)に比べ、よりがん患者の就労の継続に積極的な気持ちを持っていることがわかる

40

最後に

がん経験者及び 周囲(職場)の人の生の声

41

がん経験者

上司や同僚の理解について

「気配りを感じた」「暖かく支援してくれた」といったコメントが多く見られた半面、以下のようなコメントも。

(上司)

- ◆ 心配はしてくれたし、できることは援助してくれたが、基本的な知識はない (62歳・女性)
- ◆ 通常健康社員と同じ扱いを受け、がんの辛さを理解していない (45歳・男性)
- ◆ 抱える不安に対する理解度が低い (40歳・男性)
- ◆ 上司から『がんになったら普通辞めるよ』と言われた (51歳・男性)

(同僚)

- ◆ がんがどういう病気なのかを知らない感じだった (33歳・男性)
- ◆ がんイコール死の病というイメージを持っている (63歳・男性)
- ◆ 以前より親切に接してくれるようになったが、病気に対する同情的な雰囲気は顕著でやや窮屈に感じた (41歳・女性)
- ◆ どう接するのがいいのか判断しかねている。また、健康な作業員と同じ負担を強い風潮も感じられる (40歳男性)
- ◆ どう接していいのか、はれものに触るような雰囲気だった (45歳・男性)
- ◆ 励ましの言葉ばかり言われるとストレスが溜まる (28歳・男性)

42

「気配りを感じた」「暖かく支援してくれた」といったコメントが多く見られた半面、以下のようなコメントも。

(上司)

- ◆ 心配はしてくれたし、できることは援助してくれたが、基本的な知識はない (62歳・女性)
- ◆ 通常健康社員と同じ扱いを受け、がんの辛さを理解していない (45歳・男性)
- ◆ 抱える不安に対する理解度が低い (40歳・男性)
- ◆ 上司から『がんになったら普通辞めるよ』と言われた (51歳・男性)

(同僚)

- ◆ がんがどういう病気なのかを知らない感じだった (33歳・男性)
- ◆ がんイコール死の病というイメージを持っている (63歳・男性)
- ◆ 以前より親切に接してくれるようになったが、病気に対する同情的な雰囲気は顕著でやや窮屈に感じた (41歳・女性)
- ◆ どう接するのがいいのか判断しかねている。また、健康な作業員と同じ負担を強いる風潮も感じられる (40歳男性)
- ◆ どう接していいのか、はれものに触るような雰囲気だった (45歳・男性)
- ◆ 励ましの言葉ばかり言われるとストレスが溜まる (28歳・男性)

43

(周囲に対する希望)

- ◆ 外見上は問題なく見えても、がん治療にはとても体力を消耗することを周囲は理解しておいてもらいたい (35歳・男性)
- ◆ 気遣いはありがたいが、過剰になると負担となる (56歳・男性)
- ◆ 体調や心理面の気遣いもありがたいですが、普通時は普段と変わりなく接してくれるのが、ありがたかった (62歳・男性)
- ◆ 時々仕事にもぜんそくのような後遺症の発作が起きるが、そんな時にはあわてないでほしい (41歳・女性)
- ◆ 回りの方にがんに対しての最低限の知識を持ってもらいたい (52歳・女性)

(組織・社会に対する希望)

- ◆ がんは誰にでもなり得るという認識をもてば、がんに対して勉強してがん経験者が働くこと、働きたくても治療がキツくて働けない場合もあることなど理解できるのではないかと思います。今後、特に役職につく人たちには国の制度として治療しながら働く事を理解する研修などを徹底させて、がん経験者でも働きながら治療をしやすい社会にする必要があると思う (42歳・女性)
- ◆ 周りの理解と会社の理解が何よりもがん経験者にとって助けとなる (中略)。会社としては、シミュレーションでもいいので、上層部の人たちにもがん経験をさせて、それと闘いながらの仕事がどんなものか体験させてみれば、患者の気持ちがよく分かると思う。そのような研修が必要である (45歳・男性)

44

(感じている不安について)

- ◆ 普段の会話の中、会話のすれ違いや、自分の知識の無さから出た言葉によってメンタル面で、相手を傷つけてしまうことがあるかも、と心配 (33歳・女性)
- ◆ どのように接すれば良いか、どこまで踏み込んでいいかわからない (41歳・女性)
- ◆ 接し方に気を遣うと思うので、その辺について助言が欲しい (35歳・男性)
- ◆ 気を遣いすぎると逆にがん患者のプレッシャーになりそう (54歳・男性)
- ◆ 必要以上に気を遣うことは、相手に疎外感を与えてしまいそうで逆効果か (41歳・男性)
- ◆ がんに対してしっかりとした知識を持っているかどうか不安に思う。理解不足のせいでがん患者や闘病中の人に不快な思いをさせたくない。より理解を深め、治療の支えになってあげるべき (31歳・男性)

(学びの機会について)

- ◆ 周りの者がどの様に接したらいいのかを勉強する機会があればいい (38歳・女性)
- ◆ 接し方に気を使うと思うので、その辺について助言が欲しい (35歳・男性)